

## 世界の労働関係研究所・資料館・ 図書館(9)

フィンランド・タンペレで開かれた労働史研究機関国際協会大会(その2)

五十嵐 仁

### はじめに

前回到続いて、今回もIALHI(労働史研究機関国際協会)第32回年次大会の様相についてレポートする。この大会は、2001年9月6～8日の3日間、フィンランド第2の工業都市タンペレで開かれた。

すでに、前回、第1日とレセプションの様子について書いたので、今回は、第2日の9月7日と最終日の8日について報告することにしよう。大会会場の中央労働博物館でのプログラムは第2日の午前までだった。午後からは、様々な場所に出かけての見学や懇親会などが組まれていた。

このようなプログラムの組まれ方も、研究者の参加する学会などとは違って、私には興味深いものだった。このような内容になっているのも、研究機関とそのスタッフ同士の交流や親交を深めるといふ、この大会の目的に沿ったものだといえる。

私にとってそれは、フィンランドの自然と文化に触れるチャンスでもあった。もちろん、労働運動とその歴史にも触れることになったのだが……。

### 大会第2日(9月7日)

IALHI大会第2日の9月7日は、折り返し点にあたる。朝方降っていた雨はやがて上がり、陽が差し、夕方になってまた雨だ。天気がめまぐるしく変わる。

今日は、午前中に2つの講義と1つのガイダンスを聞き、午後からは博物館と企業の訪問である。椅子に座って話を聞く「座学」は、この日の午前中で終わった。

最初の講義は「タンペレの産業と社会の歴史」と題するパーッティ・ハーパラPertti・Haapalaタンペレ大学教授によるもので、次の「フィンランドにおける労働運動の歴史」という講義は、ヘルシンキ大学のセッポ・ヘンティールSeppo・Hentila教授が行った。先日お目にかかったフィンランド労働資料館のスタッフのご主人だ。

ハーパラ教授は、タンペレは古典的な産業都市で労働者の街であると指摘し、そこでの産業の発展と社会の変化を跡づけた。彼の話で、この博物館の隣に立つ古ぼけた白い6階建ての建物が、タンペレ初、ということはつまり、フィンランド初の工場の建物であることが分かった。

このように、フィンランド初の近代工業発祥の地であるタンペレには、数多くの歴史的な工

場が残っている。これらの古い工場を保存し、文化施設やIT関連の工場として再利用することが意識的に努力されているようで、教授はタンペレはピッツバーグやシェフィールドの過ちを避けることができたと言っていた。

講義が終わってからハーパラ教授に紹介されたので、90年代に深刻な不況に見舞われたフィンランドが、何故、その後復活できたのか、について質問した。回答は、海外における市場の拡大やグローバリズムの波に上手く乗ったことだということ、先日のSAKのマークさんと同じようなニュアンスだ。

しかし、それはフィンランドだけの条件ではないのではないかという質問を続けたら、技術教育の重要性やノキアという会社のイニシアチブ、特にその経営スタイルの優位性をあげた。不況時に技術系大学の教育の充実に力を入れ、ノキアはアメリカや日本の会社よりもリベラルで、変化に対応しやすい特性を持っていたというわけだ。

携帯電話などを製造しているノキア社は、タンペレ近郊のノキア市からその名前をとっている。今や日本でもよく知られている世界的な大企業だが、その歴史は1865年に、このタンペレから始まったという。

このノキア社の特性については良く分からないが、前者の教育についての指摘は重要だと思った。日本でも、IT化や遺伝子工学、ナノ・テクノロジーなどに関連して、理工系や生物学関連の高等教育の充実が指摘されているが、これはフィンランドの経験からいっても正当だと言えるだろう。

フィンランド労働運動史についてのヘンティール教授の話も興味深いものだった。しかし、時間をオーバーしてほとんど戦後には触れず、しかも質問時間もないということで、いささか不満が残った。

両教授の話に共通していたことは、フィンランドと隣接する大国・ソ連(ロシア)との関係の大きさ、微妙さだ。それが政治的にも経済的にも大きな影響をフィンランドに与えつけてきたことが、改めて良く分かった。

特に、ヘンティール教授が、1939年にソ連軍がフィンランドに大挙押し寄せ、フィンランドの共産主義者は銃をとって赤軍と闘ったと指摘したとき、わが耳を疑った。英語を聞き間違えたのではないかと思ったほどだ。

もう一点、教授は70年代の初頭、東ドイツの大学院で勉強し、レーニ的なマルキストになったが、それは大きな間違いだったと述べられたときも、聞き違いではないかと思った。

しかし、これはいずれも、その通りだった。後で直接話をする機会があり、これらの点を本人に確かめたからだ。

これからのフィンランドは、もっと民主的で「より社会主義的more socialist」な共和国にならなければならないというのが、教授の意見である。しかし、それはソ連型ではなく、労働組合などの影響力や発言力がさらに高まることを意味していると語っていた。

### 博物館「工場」

この後、タンペレの街にある博物館全体についてのガイダンスを受け、昨日のレセプション会場であったタンペレ市立博物館センター・ファブリーキに向かった。途中、橋を渡るときに写真を撮った。

この写真の左側に中央労働博物館の建物があり、川を挟んだ反対側の右側にこれから向かう市立博物館がある。前者は紡績工場だった建物であり、後者は機械工場だった建物だ。

この辺りは歴史的建造物保存地区のようで、古い煉瓦造りの建物がたくさん残っている。歴史を大切に、建物や景観も文化遺産として後

世に残していこうとする強い意志が感じられる。



川から見た2つの博物館

この博物館の中を、係員の方に案内していただいた。説明を聞いていると、さかんにフランス語を話す声が聞こえる。後ろの方で、英語の説明をフランス語に訳していたからだ。

会議でも使用されていたのは英語とフランス語で、IALHIの前会長はフランス語で事業報告を行った。私たちは、それを英語の通訳で聞いたわけだ。

フランス語が分かる人もかなりいるようだ。夕方のレセプションの時、この前会長がフランス語で挨拶してかなりの人が笑っていた。私はいえ、ただボカンとしているだけだった。



博物館の中の展示

博物館の中は、昔工場だったという面影も残っており、かなりの広さだ。展示されているのは、生産や産業関係だけではない。この地域の自然や歴史についてのものもあり、かなり総合的な印象を受けた。

### 労働者の家とレーニン博物館

この後、バスに乗って出かけたのは、「労働者の家」と呼ばれる労働者関連の劇場や文化施設、左翼団体の事務所などのある建物だ。

ここには、大変興味深い博物館が残っていた。今日では世界唯一となったレーニン博物館The Lenin museum<sup>(1)</sup>である。建物の表の壁には、博物館の表示と共にレーニンのレリーフが飾られている。何故ここに、このような形で、今もなおレーニン博物館が看板を掲げているのだろうか。



レーニン博物館

その謎は、中に入って係員の説明を聞いて解けた。フィンランドはロシア革命を機に独立を達成しているから、ツァーの支配を打倒したレーニンは、独立の功労者である。

(1) レーニン博物館については、英語のウェブ・サイトがある。この博物館について、詳しくは、<http://www.tampere.fi/culture/lenin/lenina1.htm> を参照。なお、この博物館もIALHIの会員である。

それに加えて、レーニンとタンペレを結ぶ特別のつながりもある。政治面だけでなく運動面でも、フィンランドはソ連(ロシア)と深い関わりを持っていることが、またも実感させられたひと齣だった。

ここにレーニン博物館があるのは、この場所で、ロシア社会民主党(ボリシェビキ)の会議が開かれたからだ。それも、「第1次ロシア革命」直後の1905年12月と翌1906年11月の2回にわたって……。

レーニンの伝記を書いているロバート・サーヴィスは、当時のロシアとフィンランドとの関係について次のように説明している。

「フィンランドはスイス程に安全ではないとしても、帝政のもとである程度の自治権を有していた。その国境線は形式的意味だけのものではなかった。……

このように、1809年以来ロシア帝政の支配下にあったフィンランドは、完全には国外ではないとしてもほとんど外国であった。それにフィンランドの社会主義者たちは帝政をひどく嫌って、帝政に迫害されているものなら誰にでも援助の手をさしのべようとしていた<sup>(2)</sup>。」

このように、1917年以前、フィンランドはロシアの一部で、しかもロシア国内よりは安全だった。したがって、ここでロシア社会民主労働党の会議が開かれても不思議ではない。そして、この2度の会議にはレーニンも出席していた。

その時の会議が開かれたのは、まさにこの場所だったと、係員は力説した。そして、レーニンの像の前に来ると、こう言ったのだ。

「ここで、初めてレーニンはスターリンに会いました。そして二人はこうして握手したので

す。」

レーニンとスターリン。一瞬、歴史が戻ったような印象だ。ここの展示も係員の説明も、ソ連崩壊の前と後とで、どう違うのだろうか。それとも違ってないのだろうか。

このレーニンとスターリンとの出会いについて、及川朝雄が書いたレーニンの年譜には次のように書かれている。ここで「タムメルフォルス」というのはタンペレのことで、カッコの中は新暦である。

「12月24日 - 30日(11日 - 17日) タムメルフォルスにおけるボリシェヴィキ党会議開催。この会議でレーニンは議長をつとめた。この会議でレーニンははじめてスターリンと会見し、国会に関する決議作成委員会において一緒に活動した。当時まで二人は手紙によったり、あるいは同志たちを通じて連絡をとってきたのである<sup>(3)</sup>。」

先ほど、レーニンのマルクス主義者であった過去を否定されたヘンティーレ教授の話を聞いたばかりなので、複雑な気持ちになった。見学者の一員としてこの説明を聞き、レーニン像を見ていた教授は、さらに複雑な思いがしていたに違いない。

なお、1906年11月の会議についても、前掲の年譜には次のように書かれている。

「11月16日 - 20日(3日 - 7日) フィンランドにおいてロシア社会民主労働党全ロシア会議が開かれ、ボリシェヴィキ、ポーランドとリトアニアの代議員をふくめて全部で14名出席した。レーニンは国会選挙参加に賛成し、立憲民主党とのいかなるブロック戦術にも反対した演説を行った<sup>(4)</sup>。」

(2) ロバート・サーヴィス(河合英和訳)『レーニン(上)』岩波書店、2002年、242～243頁。

(3) 及川朝雄『レーニン年譜(上)』岩波書店、1949年、139～140頁。

(4) 同前、160頁。

レーニン夫妻は、1906年8月20日から1907年11月末まで、フィンランドのクオックカラにある別荘（ダーチャ）に、ボグダーノフ夫妻と共に滞在した。ここはサンクトペテルブルグから40マイル足らずで、ロシアとの行政境界線（国境）から僅か5マイル程のところだった。

レーニンが「そこを離れたのは、短期に重要な集会や大会にあえて出席したときだけであった。彼は、フィンランドの町、タムペール、テリオキ、ヴィイプリでの集会に出席している<sup>(5)</sup>」と、サーヴィスは書いている。この「タムペール」での集会というのが、「ロシア社会民主労働党全ロシア会議」を指していることは言うまでもない。

この後、参加者は再びバスに乗り込み、トゥルヴァTurvaという会社に向かった。相互保険会社Mutual Insurance Companyである。この会社は労働者の相互扶助組織から出発し、労働組合や労働運動と深い関わりを持っている。それが、今回の訪問先として選ばれた最大の理由だろう。

代表者の出迎えを受け、歓迎の挨拶を聞き、レセプションの始まりだ。途中、フィンランドの労働運動史について、30分ほどの短い話を聞いた。これも結局、戦後の途中までで、尻切れトンボだった。

ただ、フィンランドの組織率の高さや労働運動の強さについて、産業化が遅れ、労働運動の発展が後から始まったことが幸いしたという指摘が、印象に残った。これも一種の「後発効果」かもしれない。

フィンランドは長い間農業国で、本格的な工業化は第2次世界大戦後、それも60年代に入ってからだという。そのために、女性の労働力化や労働者の組織化が急速に進み、サービス産業

などでもそれなりに組織が作られているというわけだ。短時間で質問時間もなかったのが、これだけでは良く分からないが、面白い指摘だと思った。

この後、帰りのバスでこの講師の方と一緒にになった。せっかくなので、日本の労働運動がフィンランドの運動から学ぶとすればどのような点だと思うか、意見を聞いた。日本とフィンランドとの違いとして、強すぎる会社、企業ベースの協議システム、職場での人権の不十分さなど、耳が痛くなるような点を指摘された。「日本についてはよく知らない」と言っていたが、なかなかどうして、的確な指摘だと思われる。

しかし、このような点をどう克服し、どう「労働の復権」を図っていくのか。それについての答えが得られたわけではない。今はまだ出発点だ。私の探求の旅は、まだまだ続く。

### 大会最終日（9月8日）

この日は、一日中、バスや船に乗って動き回るとい日程だった。この日にだけは降って欲しくない、というようなときに限って雨が降るといのが「雨男」の特性だ。そして今日もその特性は発揮され、一日中、雨が降った。それも小雨ではなく、しっかりとした雨が……。

この雨の中、午前中はタンペレ南部の工業地帯にある製紙工場を訪問し、工場の中を見学した。大変大きなプラントだが、人はほとんどいない。ほぼ完全なオートメーション操業で、働いているのはロボットだ。オペレーターはたったの14人だという。

この見学中、盛んに写真を撮っている女性に気が付いた。私にもカメラを向けている。誰だろうと思っていると、近づいてきて「少し話を聞かせてくれませんか」と言う。新聞記者のよ

(5) ロバート・サーヴィス、前掲書、243頁。

うで、私が日本から来たことを知っていた。

工場の印象やIALHIの大会、フィンランドの印象などについて意見を聞かれ、少し話をした。短時間のインタビューをされたわけだ。テープが回っているところで、英語で話をしたのは初めてだった。何かの記事にでも使われるのだろうか。



製紙工場の中

この後、そこの社員食堂で昼食を摂り、近くの工場関連のパルプ博物館に行った。この博物館も、かつてのパルプ工場の再生利用だ。ここには、どういうわけか、フットボール博物館も併設されている。

タンペレには、25の博物館があるそうだが、そのうち産業・歴史関係は7つだという。珍しいものでは「スパイ博物館」というものまである。文字通り、アメリカのCIAやイギリスのMI6などのスパイ活動についての博物館だそうだが、中を見ていないので詳しいことは分からない。好事家が集めたものを展示しているようだ。

このように、こちらでは何でも集めて展示するという傾向があるようだ。博物館文化とでもいうのだろうか。この辺も日本との違いだといえるだろう。

### ムリッカ・カレッジ

この後はいよいよ船に乗って湖のクルージン

グだ。でも、雨足は激しく、空には黒い雲が漂い、遠くが霞んでいる。最悪の条件だ。しかし、出発してみると、波はなく、思ったほど揺れなかった。アコーディオンの演奏などもあって、旅情たっぷりだった。

行き先はムリッカ・カレッジ Murikka Collegeで、船に乗って1時間半ほどだという。そこで、サウナに入ってリフレッシュして帰って来るというスケジュールだ。

「カレッジでサウナに入る？」 スケジュール表を見たとき、この意味が分からなかった。そして、船が着き、フィンランド式のサウナで温まって軽い食事を摂っていたとき、その謎が解けた。ここは、金属労働組合が所有する組合員用の研修機関だったのだ。

「カレッジ」というのは、大学は大学でも「労働大学」である。その付属施設として宿泊施設やサウナがあり、そこを私たちが利用したというわけだ。

サウナに入り、オレンジ色に揺れる暖炉の炎を見つめながら、ワインのグラスを傾けた。哀愁を帯びたアコーディオンのメロディーが聞こえてくる。日本を離れ、アメリカを経由してヨーロッパに渡った。そしてここ、北の国フィンランドである。良くもこんな遠くまで来たものだと思い、何だか、ジーンときてしまった。

こうしてIALHI大会の日程は無事終了した。帰りの船では、参加者に個別に話をして、これからの旅行のポイントをとりまくった。そのお陰で、かなりの国の文書館や研究所に、私の訪問の意図を伝えることができた。ホスト役だった中央労働博物館の所長さんに、各国から見えている方を次々に紹介していただいたお陰だ。

結局、この大会を通じてかなりの代表と接触することができた。明日から訪問するスウェー

デンとデンマークの2カ国は、労働組合と文書館の両方のアポイントメントが取れている。このほか、ノルウェー、オランダ、イギリス、アイルランド、ベルギー、ドイツ、スイス、フランス、イタリアからの参加者に、私の訪問の意図を伝えることができた。いずれも、訪問を歓迎し受け入れるとの返事もらったが、詳細はこれから詰めなければならない。

こうして、第1の関門は、ほぼ目論見通りに

突破できたように思う。イギリスやフランス、イタリアなどは研究所や文書館は一つではないので、かなりの数の施設を見ることができそう

だ。  
これで今後の旅行の中身ができてきた。あとは、無事、それぞれの訪問場所に予定通り到着できるかどうかだ。ひょっとしたら、そちらの方が大変かもしれない。

(いがらし・じん 法政大学大原社会問題研究所教授)



## ディーセント・ワークをめざす ILO の近刊 (英語版)

ご注文は、洋書店あるいは ILO 駐日事務所まで。

〒150-0001 渋谷区神宮前5-53-70、UN ハウス 8F 電話03-5467-2701、FAX03-5467-2700

### Corporate Success through People : Making International Labour Standards Work for You 「人を活かして企業が成功する国際労働基準の活用法」

企業経営者が、国際労働基準を軸に人材を活用し、競争力を高める方法を多数の実例をもとに実証する。社会的経営の実践、質の高い人材の採用、差別の撤廃、労働条件、能力開発、労使関係、レイオフ、児童労働などをテーマに、アディダス、ダウ・ケミカル、GM、シェラトン、マリOTT、バーガーキングなど多くの企業例を掲載。

N. Rogovsky, E. Sims 著 2002年刊 129pp. 2,500円

### Codes of Conduct and Multinational Enterprises (CD-ROM)

#### 「多国籍企業と行動規範」CD-ROM 版

企業の社会的責任ある行動を推進するために採択された9産業部門の240規範を収録。結社の自由、団体交渉、非差別と機会均等、賃金、安全衛生規準、労働時間、訓練、仕事の保障、児童労働、強制労働に関する諸規定を、ILOの「多国籍企業と社会政策に関する三者宣言」(1977年)に照らして概観する。

2002年製作 Windows 9x/Me/2000/NT 対応 4,500円

### Youth unemployment and employment policy : A global perspective

#### 「若年者の失業と雇用政策：世界の展望」

OECD 諸国で1千万人にのぼり、13%近い失業率を記録する若年者の失業問題について、その原因と結果を分析し、若年者労働市場の特徴を研究。若い労働力を良質な雇用に吸収することに失敗した多数の事例を検証し、教育・職業訓練システムの役割を見直す。

N. O'Higgins 著 2001年刊 212pp. 2,750円

### Organized Labour in the 21<sup>st</sup> Century 「21世紀の組織労働」

労働組合は、環境の変化にどのように対応しているのか。グローバル化された経済社会の中で、労働組合が果たす役割について、カナダ、インド、日本、韓国、スウェーデン、米国などで行った調査結果をまとめた一冊。

V. Jose 編 2002年刊 406pp. 3,000円